



# 伊達市ポンマ遺跡

## —有珠地区における近世アイヌ民族の 土地利用の変遷と災害の影響—

伊達市噴火湾文化研究所・埋蔵文化財専門委員 永谷 幸人



### 有珠地区ポンマ遺跡の発掘調査

伊達市の北西端にあたる有珠地区には、有珠4遺跡やカムイタブコブ下遺跡など、近世アイヌ文化期の重要な遺跡が多数点在しています（図1）。そのなかの一つであるポンマ遺跡において、2012年夏に伊達市噴火湾文化研究所による発掘調査が実施されました。

この調査では、近世アイヌ文化期のチセ（アイヌ民族の住居）跡や墓、貝塚、畑跡など、ひとびとの生活に関わる遺構がセットで見つかりました。また、こうした遺構とともに、17世紀の有珠地区を襲った二度の大災害（1640年の駒ヶ岳噴火津波と1663年の有珠山噴火）の痕跡も見つかりました。

これらの成果から、有珠地区の近世アイヌ民族の暮らしぶりや、土地の使い方、さらには災害に向き合ったひとびとの姿の一端をうかがい知ることができましたので、紹介したいと思います。



図1 ポンマ遺跡の立地と周辺遺跡

### 災害痕跡による時期区分—駒ヶ岳噴火津波（1640年）と有珠山噴火（1663年）

近世アイヌ文化期（17世紀）の有珠地区は、1640年の駒ヶ岳噴火およびそれに伴う津波と、1663年の有珠山噴火という二度の大災害に見舞われたことが文献記録（『新羅之記録』）によって明らかとなっています。

有珠地区の遺跡からは、こうした大災害の痕跡として火山灰や津波堆積物が検出され、墓や貝塚などの遺構は、こうした災害痕跡との新旧関係から、駒ヶ岳噴火（1640年）より古いものなのか、駒ヶ岳噴火と有珠山噴火の間（1640～63年）のものなのか、あるいは有珠山噴火（1663年）よりも新しいものなのかを知ることができるのです。

今回の調査では、図2・表1のように遺構が検出されました。まず、時期ごとに概観していきたいと思います。

なお、以下の本文や図の中では、墓を「GP〇〇〇」と表記します。これは、Grave Pitの略と検出順を示す番号を組み合わせたもので、発掘調査時に割り振った遺構ナンバーです。

表1 時期別の検出遺構数

駒ヶ岳噴火(1640年)以前	墓3基	チセ跡2軒
駒ヶ岳噴火～有珠山噴火 (1640～63年)	墓2基、貝塚、畑跡	
有珠山噴火(1663年)以降	墓16基	

### 駒ヶ岳噴火（1640年）以前

駒ヶ岳噴火（1640年）より古い時期の遺構として、GP017・GP020・GP021の3基のアイヌ墓が検出されました。

このうちGP021は3歳前後の小児であることが人類学的な分析によってわかりました。この小児が生前どのような立場であったのかなどを考慮する必要はありますが、近世アイヌ文化期の有珠地区では、少なくとも3歳以上から墓地に埋葬されるものがあられ、社会的成員あるいは「この世の者」として認められたのではないかと考えられます（表2）（青野・永谷ほか2012）。

### 駒ヶ岳噴火～有珠山噴火（1640～63年）

駒ヶ岳噴火から有珠山噴火までの23年間は、この地点が生活域として最も活発に利用された時期だったようです。この時期の遺構として、貝塚や畑跡、墓2基およびチセ跡2軒が見つかりました（図2）。

なお、チセ跡については、いずれも駒ヶ岳噴火お



図2 有珠山噴火前後の遺構配置図

よびそれに伴う津波の痕跡との関係が不明であったため、厳密には有珠山噴火（1663年）以前の遺構であることしかわかりませんが、周囲の遺構との位置関係などから、この23年間に該当する可能性が高いと判断しました。

道南および噴火湾沿岸一帯で確認されたチセ跡は、本例をいれても3軒しかなく（もう1軒はカムイタブコプ下遺跡）、さらに柱穴列の全体像が明らかになった初めての事例であることから、貴重な発見となりました。

た。

チセ跡の形や大きさは、2軒とも長辺約10m、短辺約6.5mの長方形で、セム（入り口側に設けられる物置を兼ねた前室）は確認されませんでした。チセ内部のやや北寄りの位置から、瓢箪のような平面形を呈する炉が見つかりました。

この炉の形や、位置、さらには眼前に有珠湾を望むという周辺地形を鑑みると、チセの入り口は北側（有珠湾側）であった可能性が高いと考えられます。その場合、奥壁（南壁）には神窓（カムイが出入りする神聖な窓）があり、神窓側の屋外に、送り場や祭壇などが設けられたこととなります。チセの南西側から貝塚が検出されていることから、この貝塚がチセに伴う送り場のような性格を有していた可能性もあります。アイヌ民族の暮らしぶり（生活や信仰）を考えるうえで、このようにチセ跡と貝塚（送り場）とを関連づけて捉えることが重要であると思います。

貝塚は、有珠山の火山灰で直接パックされていたことから、噴火の直前までに作られたことがわかりました（写真1）。

アサリが多数を占めますが、ホタテ、イガイ、ウチムラサキ、魚骨など特定の種が集中する箇所も認められました。これは貝類の採取場所や採取時期などを反映している可能性があります。貝塚の縁からは、近世アイヌ民族が狩猟や漁撈に用いた骨角器が出土しています。（図3）。

また、畑跡は貝塚に覆われた状態で見つかりました。このことは、1640年から1663年の間に、まず畑が営まれ、その後に貝塚が形成されたことを示しています。貝塚の形成期間を考慮すると、畑が営まれていたのは比較的1640年に近い時期であったと考えられます。



写真1 有珠山火山灰下から見つかった貝塚（奥は有珠山）